

[ラルフ・W・ハリス]「聖霊」

Ⅲ. 新約時代における聖霊

マタイによる福音書 3：11～17、使徒行伝 2：1～4、ヨエル書 2：28～32

旧約時代においてさえ、聖霊は活動的であったが、新約時代においてはさらに拡大された聖霊の働きが備えられていた。聖霊はキリストの生涯と伝道の中に力強く現わされた。

しかし、聖霊は使徒行伝の時代には、新しい教会の発展に伴ってさらに大きな役割を果たした。



四百年の間、聖霊は沈黙しているかのように見えた。

民に神のメッセージを語るために聖霊によって感動された預言は聞かれなかった。

そののち、いちじるしい聖霊の働きが見られる時代が来た。

年老いた祭司とその妻、ザカリヤとエリサベツは、彼らが年齢的な条件を越えて男の子を与えられるということを天使から告げられた。そこでバプテスマのヨハネが生まれたのである。「彼は母の胎内にいる時からすでに聖霊に満たされていた」（ルカ 1：15）。

彼の父、ザカリヤもまた聖霊に満たされて、幼な子の非凡な将来について預言したのである（ルカ 1：67）。

しかし、これがこの時代における聖霊の働きのすべてではなかった。

天使がナザレのおとめに現われ、彼女が聖霊によってみごもり、男の子を産むであろうと告げた。主の使いはまたマリヤの婚約者のヨセフに現われ、恐れている心を安心させて、彼女の妊娠は聖霊によるものであると告げている。

それからイエスの降誕後、宮参りにおいて聖霊はふたたび、いちじるしく働いている。

イエスこそ約束されたメシヤなるお方である、との黙示がシメオンによって語られた。聖霊が彼の上に宿っていたのである。そしてその黙示は聖霊御自身からのものであった。またシメオンが宮にやって来たのも聖霊の導きによるものであった。

それから、しばらくの静かな時があったが、イエスの伝道の開始と共に聖霊はふたたび、まさにその活動の舞台の中心にやってこられた。

これに関しては、キリストが御自身をむなしいものとしたことを理解する必要がある。
ピリピ人への手紙2章には、キリストは神と等しいお方、神そのものであったと記している。

しかし、彼は、このような最高の地位を持っていたが、自発的にそれらを脇に置いて人となり、死の苦しみを受けたのである。彼は世界が存在する以前に父と共に持っていた栄光を傍らに置いて、僕（しもべ）のかたちをとり、人間となってこの世に来られたのである。彼は**聖霊の働きにより、自ら注意深く神に信頼したのである。彼は御自身の外部の力、すなわち聖霊の力によってなされたと同様に、神としての彼の本質的力を用いることで、あまり超自然的なわざをしないようにみずからを制限された。**

イエスはつねに聖霊により頼んだのである。

この真理はすべての信者を励ますものである。それはイエスに行なわせた力あるわざは今日、信者にも可能であることを意味することにほかならない。

聖霊が主の伝道の開始を告げるためにイエスの上に注がれたのは、ヨルダン川においてである。それは何という光景であったことだろう。バプテスマのヨハネがイエスに洗礼を施し、神の御子が水からあがってくると、ヨハネはすでに彼に示されていたしるしを見た。

神はバプテスマのヨハネに、「ある人の上に、御霊が下ってとどまるのを見たら、その人こそは、御霊によってバプテスマを授けるかたである」と告げてあった（ヨハネ1：33）。そこで天が開けて、聖霊がはどのように下った時、ヨハネはこのお方こそ待っていたキリストであると知った。

聖霊の働きはイエスの公生涯の中にいちじるしい。

マタイ4：1は、イエスが御霊によって荒野に導かれたのは、悪魔に試みられるためであると言っている。マルコは同じ事件を述べるに当たって聖霊の働きを、「追いやった」というさらに強い言葉で表現している。聖霊がこんなことをするとはだれが考えるであろう。しかし、聖霊はサタンの攻撃に対して、イエスを置き去りにするためにそこへ導いたのではなかった。神の御子をして、悪魔の誘惑に勝たしめたものは御霊のつるぎ、すなわち神の言葉であった。

こうして三年半の力を秘めた伝道は始められた。

その間、イエスは人間の直面するすべての敵に遭遇し、それに勝利したのである。悪霊どもはイエスが近づくと逃げ出した。病いはイエスの命令によっていやされた。イエスが触れるとらい病はきよめられた。見えない人の目は見え、聞こえない人は聞こえるようになった。

イエスの力ある伝道は今までに例を見ないものであった。

自然界でさえ、彼の言葉に従った。イエスは「静まれ」という一言で、激しいあらしを静

めた。海の水はイエスの足を支える道となった。彼は五つのパンと二つの魚をもって空腹な群衆を養った。

イエスが言葉を出す時、死でさえもその力を失った。

会堂司の娘に対するイエスの「タリタ、クミ」、やもめのひとり息子への「若者よ、起きよ」、「ラザロよ、出できなさい」との声は死人に響き、ふたたび生き返らせたのである。

彼の語りかけさえ普通の人間とは違っていた。

「彼のように語る者はだれもない」というのは、イエスに聞いた人々の証しであった。彼の語ったことばかりか、語った方法はまったく注目すべきものであった。人々の生活を一変せしめたキリストの語りかけには、特別な力と権威の重みがあった。

このような生涯を思い出して感激する時、それは三位一体の神の第三位なるお方、聖霊の力によるものであったことを忘れてはならない。神の御子はそのわざを遂行したのであった。キリストは神としてではなく、聖霊に油注がれた人間として働いたのである。

教会における聖霊

キリストは昇天により、父なる神の右に帰り、聖霊は今までよりもさらにいちじるしく人々に働きかけるものとなった。

キリストは弟子たちが偉大な宣教の命令を完遂するために、上からの力を与えることを約束された。

主はさらに、この事について、彼らはやがて聖霊のバプテスマを授けられるであろうと語っている。120名の者たちが屋上の間で待ち望んでいたのは、この新しく、特別な意味をもった聖霊の来臨のためであった。そしてペンテコステの日、聖霊は激しい風のように臨み、舌のようなものが、炎のように現われて彼らの上にとどまり、彼らは心も体も捕えられて他国の言葉を語り出した。それは超自然的な力であった。

使徒行伝は普通「使徒たちの働き」と呼んでいるが、「聖霊の働き」と呼ぶ方がさらにふさわしい。これらの人々の生活の変化は何に起因するものだろうか。1世紀の教会を形づくった力あるわざの連続は何を生み出したのだろうか。今日まで続いているところの偉大な運動である1世紀の福音宣教の急速な進展は、何を語っているだろうか。それこそ神の聖霊の働きなのである。

聖霊は1世紀の信者たちが、かの偉大な宣教命令を完了するために必要なすべてを備え

ていた。

聖霊はユダヤ人信者と異邦人回心者の間にあった差別を解決する知恵を与えた。

聖霊はパウロがある地方へ行こうとするのをとどめて、ヨーロッパへ行かせた。

聖霊は使徒たちが支配者や指導者たちの前に立った時、言うべきことを教えた。

聖霊はイエスが彼について約束した通りのお方であった。

千年王国における聖霊

この時代を通じて聖霊は教会の行政官である。

聖霊が崇（あが）められた時、教会はリバイバルを味わってきた。聖霊が無視され、忘れられた時、教会はその働きにおいて失敗してきたのである。しかし、聖霊があまねくそのわざを広めて行なう時代が来ようとしている。千年王国の時代には、今までにかつてなかった偉大な聖霊の注ぎがなされる。イザヤ 32：15 は「霊が上からわれわれの上にそそがれる」と言っている。預言者はさらに千年王国時代の状態を語っている。そこには義と平和と平安、そして信頼がある（イザヤ 32：16, 17）。

聖霊の働きは個人と同じように国家の上にもなされる。

千年王国時代においては、聖霊が個人に対して行なわれたことを、大きな意味において国家に及ぼすであろう。

この時代について神は、エゼキエル 35：27 に「わたしはわが霊をあなたのうちに置く」と言っている。これこそ神が御自身の民に約束された契約の項点でありまた完成である。聖霊を個人的に体験することは何とすばらしいことであろうか。